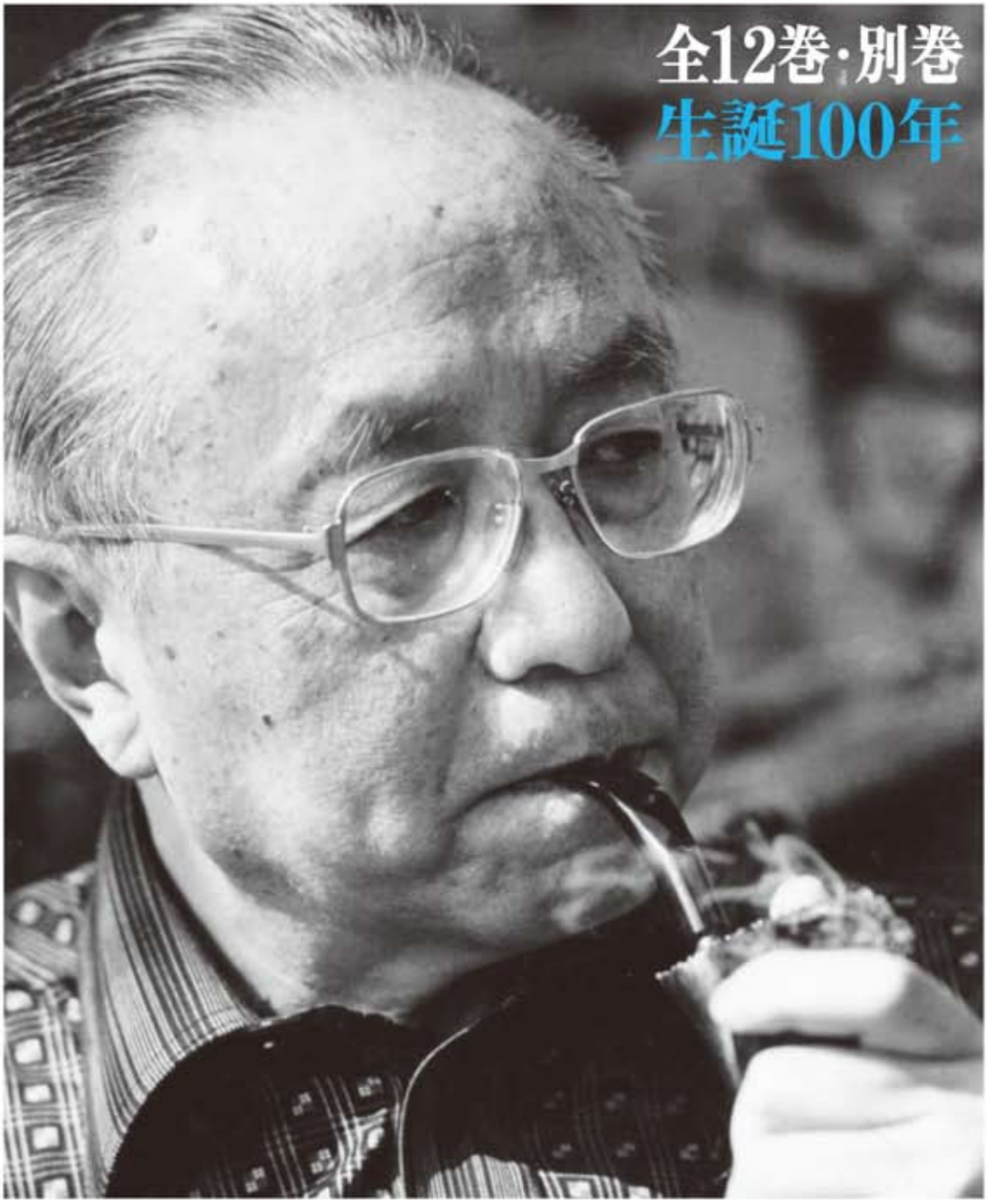
井筒俊彦全集



東洋と西洋の叡知を極めた世界的碩学の全貌がついに明かされる。

慶應義塾大学出版会

刊行にあたって

二〇一三年は井筒俊彦の歿後二十年にあたり、二〇一四年には生誕百年を迎えます。この節目の年に、井筒俊彦が日本語で執筆し刊行したすべての著作を、執筆・発表年順に全十二巻・別巻で刊行します。

三十を超える言語を自在に逍遥した井筒俊彦は、その天才的な言語能力を縦横に駆使して、ギリシア哲学、イスラーム哲学、中世ユダヤ哲学、インド哲学、老荘思想、仏教、禅までをも含めた人類の叡知を時空を超えた有機的統一体として読み解き、東洋哲学と西洋哲学の「対話」を目指しました。

本全集は、その井筒哲学の全体像を明かし、思索の原点から構築への道程を辿るものです。井筒俊彦の言語哲学思想は、二十一世紀に生きるわれわれにとって重要な視座であり、広く共有されることを願うものです。

二〇一三年六月

編集顧問
鈴木孝夫　鳥居泰彦　松原秀一

編集委員
岩見　隆　鎌田　繁　坂上　弘
澤井義次　野元　晋

編集担当
木下雄介　若松英輔

（五十音順）

鎌倉の書斎にて

井筒俊彦の生涯

1914年5月4日、東京市四谷区に生まれる。

西脇順三郎のシュルレアリスム詩論に触発された井筒俊彦は、慶應義塾大学で西脇に師事し言語学者として出発、「言語学概論」をはじめとするその新鮮な講義は、大教室から人が溢れるほど人気を博した。その他、「ギリシア神秘思想史」、「ロシア文学」などの講義を行なう。

1941年、処女著作『アラビア思想史』、49年、『神秘哲学』など、初期の代表著作を発表。

1956年に発表した英文著作『Language and Magic』は、ロシア・フォルマリストのローマン・ヤコブソンの目にとまり、彼の推薦を得てロックフェラー財団フェローとして、レバノン、エジプト、シリア、ドイツ、パリなど中近東・欧米での研究生活に入る(1959-61年)。

これを機に、日本から世界へと活躍の場を広げ、マギル大学やイラン王立哲学アカデミーにおいてイスラーム学研究や執筆活動に従事した。1961年マギル大学客員教授、69年同大学イスラーム学研究所テヘラン支部教授、75年イラン王立哲学アカデミー教授。イスラーム思想や東洋哲学に関する英文著作・翻訳を多数刊行する。

1967年、20世紀の心理学、宗教学の世界を代表するカール・グスタフ・ユングやミルチャ・エリアーデらの参加する「エラノス会議」(1933年スイス・アスコナで創始)に招聘された。人間の精神性を探究することを理念とした「エラノス会議」は、毎年夏、百人ほどの聴衆を前に、十人前後の宗教学者、哲学者、科学者、芸術家らが、それぞれの専門領域における新しい考えを発表するという学際的な精神運動で、井筒は鈴木大拙に次ぐ二人目の日本人正式レクチャラーとして、以後15年にわたりほぼ毎年、老荘思想や禅、儒教など東洋哲学についての講演を行なった。

1979年、イラン革命激化のためテヘランより日本に帰国。長年の研究成果による独自の哲学を、日本語で著述することを決意、『意識と本質』(1980-82年)、『意味の深みへ』(1985年)、『コスモスとアンチコスモス』(1989年)、『超越のことば』(1991年)、絶筆となった『意識の形而上学』(1993年)などの著作を発表した。

1982年日本学士院会員。同年、毎日出版文化賞、朝日賞受賞。1993年鎌倉の自宅にて逝去(78歳)。鎌倉市円覚寺に眠る。

エラノス会議の円卓(table ronde)
世界中から集まった第一級の学者たちが、マッジョーレ湖ほとりの円卓を囲んで語り合った。

井筒俊彦全集

全十二巻・別巻

（巻数順に配本します。）

第一巻 アラビア哲学

一九三五年―一九四八年

ぴろそぴあはいこおん―philosophia haikōn
松原秀治氏訳　ドーザ『言語地理学』に就いて
ハイドン編『回教の現在と将来』
ガブリエリ『現代アラビア文学の主流』
ザマフシャリーの倫理観
アラビア文化の性格―アラビア人の眼
『アラビア思想史』自序
『東印度に於ける回教法制（概説）』
回教神秘主義哲学者　イブヌ・ル・アラビーの存在論
トルコ語
アラビア語
ヒンドスターニー語
タミル語
回教に於ける啓示と理性
マホメット
イスラム思想史
アラビア科学・技術
ロシアの内面的生活
アラビア哲学―回教哲学

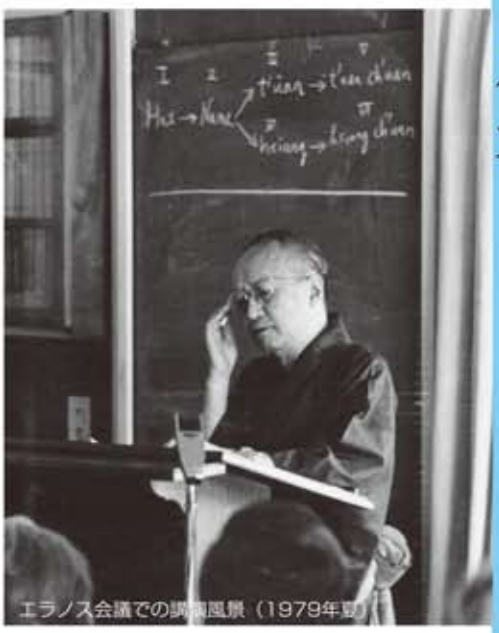
―ああ僕も地平線が見える。だけど、僕は海が恋しいんだ。おおタラッタ。タラッタ。
（ぴろそぴあはいこおん）

第二巻 神秘哲学

一九四九年―一九五一年

詩と宗教的実存―クロオデル論
『神秘哲学』（底本＝一九七八年新版）
『アラビア語入門』序文
神秘主義のエロス的形態―聖ベルナール論

―言詮不及！　それが神秘家の我々にたいする最後の言葉である。さればかかる体験の内実が哲学の対象となり得ぬことはいうまでもない。人間的ロゴスが思惟となり言語とな



エラノス会議での講演風景（1979年夏）

第五巻 存在顕現の形而上学

一九七八年―一九八〇年

監修者のことば（『イスラーム古典叢書』）
東西の哲学（今道友信との対談）
いま、なぜ、「西田哲学」か
モッラー・サドラー『存在認識の道』解説
ルーミー『ルーミー語録』解説
北洋社版『ロシア的人間』後書
『神秘哲学』新版前書き
対話と非対話―禅問答についての一考察
イスラーム世界とは何か（岩村忍との対談）
『イスラーム生誕』はしがき
イスラーム哲学の原点
イスラームとは何か
本質直観―イスラーム哲学断章
追憶（『回想の厨川文夫』）
国際会議・学際会議
『イスラーム哲学の原像』序
道程
慶應国際シンポジウム所感
人間存在の現代的状況と東洋哲学
武者修業
正師を求めて

第九巻 コスモスとアンチコスモス

一九八五年―一九八九年

事事無礙・理理無礙―存在解体のあと
三田時代―サルトル哲学との出合い
『叡知の台座』まえがき
創造不断―東洋的時間意識の元型
イスマイル派「暗殺団」
エリアーデ哀悼―「インド体験をめぐって」
『開かれた精神』の思想家（『プロティノス全集』）
『西谷啓治著作集』への推薦文
気づく―詩と哲学の起点
コスモスとアンチコスモス【講演の音声CD付】
風景
図書　私の三冊
中世ユダヤ哲学史における啓示と理性
下村先生の「主著」
禅的意識のフィールド構造
『マホメット』（学術文庫）版まえがき
『コスモスとアンチコスモス』後記

―「有」が窮極においては「無」であり、経験世界で我々の出合うすべてのものが、実は「無」を内に抱く存在者（「無」的「有」）であり、要するに絶対無分節者がそのまま意味的に分節されたものであることを我々が悟る時、そこに自由への「開け」ができる。
（コスモスとアンチコスモス）

第十巻 意識の形而上学

一九八八年―一九九三年

言語現象としての「啓示」
アヴィセンナ・ガザーリー・アヴェロエス「崩落」論争
思想と芸術（安岡章太郎との対談）
中公文庫版『ロシア的人間』後記
編纂の立場から（岩波講座『東洋思想』）
東洋思想

するのであるから。

（『神秘哲学』）

第三巻

ロシア的人間

一九五一年―一九五三年

『露西亜文学』
『マホメット』（底本＝一九五二年初版）
トルストイに於ける意識の矛盾性について
『ロシア的人間』
クローデルの詩的存在論

――人類全体の宗教的救済ということを窮極の念願とするドストイェフスキーにとっては神秘家であれ癲癇患者であれ、「永遠の今」の直観を許されたごく少数の特殊な人達だけが救われても、そういう体験を得られない他の数千万の大衆がそのまま後に取り残されるなら、何にもならないのだ。

（『ロシア的人間』）

第四巻

イスラーム思想史

一九五四年―一九七五年

アラビア文学
トルコ文学
ペルシア文学
『愛のロゴスとパトス』訳者序
マホメットとコーラン
『コーラン』解説
記号活動としての言語
コーランと千夜一夜物語
レバノンから――ベイルートにて
カナダ・モントリオールにて
ボストンにて
『コーラン』改訳の序
哲学的意味論
コーラン翻訳後日談
東西文化の交流
回教哲学所感
禅における言語的意味の問題
『イスラーム思想史』

師と朋友

――「地球社会化」についての現代の我々の考えのなかに、「自己」をめぐる東洋哲学的視野を導入することは……我々自身の奥底にひそむ文化的ディアレクティークのエネルギーを活性化するための、きわめて有効で有意義な道なのではなかろうかと私は考えます。

（人間存在の現代的状況と東洋哲学）

第六巻

意識と本質

一九八〇年―一九八一年

意識と本質
神秘主義の根本構造（上田閑照・大沼忠弘との鼎談）
イスラームの二つの顔
序詞（『イスラーム神秘主義におけるペルソナの理念』）
第一級の国際人（『鈴木大拙全集』）
一九八〇年「みすず」読書アンケート
イスラーム文明の現代的意義（伊東俊太郎との対談）

――神のコトバ――より正確には、神であるコトバ……

（意識と本質）

第七巻

イスラーム文化

一九八一年―一九八三年

『イスラーム文化――その根柢にあるもの』
一九八一年「みすず」読書アンケート
追憶――西脇順三郎に学ぶ
デリダ現象
幻影の人――池田彌三郎を憶う
行脚漂泊の師 ムーサー
「読む」と「書く」
『コーランを読む』

――コトバは透明なガラスではない。本来的に不透明なコトバが、自らの創造力でリアリティを描き出す、ただそれだけ。こういう形でのコトバの展開が、すなわち存在の自己形成なのである。

（「読む」と「書く」）

テクスト「読み」の時代
マーヤー的世界認識
『エラノス叢書』の発刊に際して
中公文庫版『イスラーム生誕』後記
意味論序説――『民話の思想』の解説をかねて
『超越のことば』あとがき
マーク・テイラー『さまよう』推薦文
『著作集』刊行にあたって
意識の形而上学――『大乗起信論』の哲学
二十世紀末の闇と光（司馬遼太郎との対談）

――要するに、存在には裏側があるということだ。存在の裏側、存在の深層領域。そこにこそ存在の秘儀がある。

（『エラノス叢書』の発刊に際して）

第十一巻

意味の構造

一九九二年

『意味の構造』
附録・牧野信也による解説

――『コーラン』の諸概念を『コーラン』自身によって、他のいかなるテクストにも依拠することなく、解釈するということ。いわば『コーラン』を構成する鍵概念を、『コーラン』自身に解き明かさせる、ということなのである。

（『意味の構造』）

第十二巻

アラビア語入門（横組み）

『アラビア語入門』
ヒンドスターニー語
アラビア語 ほか

――アラビア語……それは譬えてみれば、丁度、精巧を極めた、そして無限に複雑な機械を持つ時計のようなものである。

（『アラビア語入門』）

別巻

補遺・目録・年譜・索引

推薦のことば

梅原猛 哲学者

日本の哲学者がほとんど研究しないイスラーム哲学を掘り下げ、それによって西田幾多郎の行なった東西哲学の統合を試みた井筒俊彦氏の思想的冒険は驚嘆に値する。氏の著作の中には、戦後の日本の最も深い哲学的思弁があると言えよう。

山折哲雄 宗教学者

古典的な哲学思想を、たんなる解釈や註釈の域から解き放ってより高次の比較と共存のレベルに転轍するためには、言語の壁をぶち破らなければならない。そうして風穴をあけ、新しい生命のエネルギーを装塡しなければならない。その大仕事をやりとげた二人の人間が、この日本列島にはいたと思う。一人が先達としての鈴木大拙、二人目がこんど生誕100年を記念して全集が出る井筒俊彦である。だがその二人に後続する人間は、この国にはまだ現われてはいない。なぜ現われてはいないのか、その秘密を解き明かす鍵が、井筒さんの文章の各所に豊かにちりばめられているにちがいない。井筒さんの孤独な仕事場である書斎は、そのままの姿で、世界各地で行なわれた国際会議の場に、地つづきでつながっていたと思う。

ラカン派の精神分析家を東京に招いて開かれたシンポジウムの席上、ラカンは東洋の羅漢に通じますと、笑みをたたえていっておられた井筒さんの童顔が忘れられないのである。

中村廣治郎 イスラーム学者

知の巨人・井筒俊彦の軌跡は広くかつ深い。言語哲学、ロシア人論、古典ギリシアの神秘哲学からコーラン、イスラーム神学・哲学の研究をへてイスラーム神秘主義、さらにそれと通底する仏教、インド哲学、老荘思想、ユダヤ教にいたる神秘思想を広く東洋哲学として捉え、比較哲学的にその深い意識の多層的な共時的構造とそこでの言語の意味分節作用の解明に及ぶ。早くからその成果を広く海外で紹介し、晩年には故国日本で精力的に執筆活動を続け、グローバル化の中で日本の読者に東洋人としての実存的自覚を促してきた。

いまここに、日本語に限定されたものではあるが、その学問的業績とそれを背後で支えた思想的営為の軌跡、井筒俊彦の全テクストが年代順に提供されている。この全集には随所に、解説、序、後記、エッセイなどの形で、著者自身の心の内面を吐露した文章がはめ込まれていて、読者の読みを助けてくれるであろう。一読を強くお薦めしたい。

吉増剛造 詩人

存在は言葉である——木葉下(ち)る、……（屈原『九歌』、「意識と本質」（本全集第六巻）、井筒さんは"下(ち)る"、わたくしは"下(フ)る"、芭蕉さんだと"下(しずま)る"と読むだろう、……）湖底(そこ)を思わせるような、叡智の明澄なひびきが井筒俊彦の本にはあって、……井筒氏の木には、……いいかけようとしているその「言語アラヤ識」（しかし同書では「木」とも「種子(シュウジ)」とも、氏も（毛）いいかけていて、……）が、静かにして平らか、……（道元は平(びょう)と宋音で読むのだろう、……空海やアーサー・ウェイリー(同)なら、……）、こんな木や本ははじめてだ、……。

『コーランを読む』（第七巻）の一行のなんという澄んだ空気、トーン。（はじめはコーラン。丸括弧は井筒さん。「山々を杭にしてやったではないか。」（山々でもってぴったり固定したという。テントを張るときのイマージュなのですね。）初めて読んだこのとき、ダマスカスにて、夏……。じつは小文を「井筒俊彦を音読する」と題して綴りはじめていた。井筒氏のなかで様々に"吹き渡っていたであろう言語"に耳を澄ましてみる試みであった。音読しつつ「自己顕現をする異次元」の言葉の聲に耳を澄ます試みであった。声に聞く、声のない音読。それが井筒俊彦にはふさわしい。「言語哲学としての真言」（第八巻）からその一篇を音読しつつ、井筒俊彦の聲を聞く。"……わけです"が井筒の聲だ。）

"すべての穴がそれぞれ自分独特の音を出す。「万籟(ばんらい)怒号す」というわけです。""わけです。""すべての穴"は"すべての言語"、……。

存在は言葉である——木葉下(フ)る。

安藤礼二 文芸評論家

井筒俊彦は20世紀の日本が生み落とすことができた最大かつ最高の思想家である。思索の対象としたジャンルと地域の多様性においても、その理解の深みにおいても、他の追随を許さない。柳田國男の民俗学と折口信夫の古代学さらには西脇順三郎の詩学を一つに総合し、西田幾多郎の哲学と鈴木大拙の宗教学に橋渡しした。

『コーラン』の読解によって宗教の起源を砂漠のシャーマニズムに探り、『神秘哲学』の構築によって哲学の起源を舞踏神ディオニュソスの憑依に探った。そしてユーラシア大陸の極西に生まれた神秘主義思想と、ユーラシア大陸の極東にまで達した神秘主義思想を一つに結び合わせた。東洋という視座から日本、アジア、世界を統一的に論じる道を拓いた。そのとき、もはや学問的な研究と詩的な表現の間の差異は消滅してしまう。グローバルであることとローカルであることの差異もまた。井筒俊彦を読み直すことから、次なる100年の思想と表現が始まる。

存在と言語をめぐる広大無辺な思想コスモス

本全集の特色

収録

1. 井筒俊彦の英文著作・翻訳をのぞくすべての日本語著作を、執筆・発表年順に収録した初の本格的全集。

2. 『世界文学辞典』収録の40以上に及ぶ執筆項目、晩年の珠玉のエッセイ「風景」、「いま、なぜ、西田哲学か」など、単行本未収録の貴重な著作も網羅。

3. 第十二巻に『アラビア語入門』や諸言語に関する論文を収録（横組み）。

4. 未発表作品、著作目録、年譜、総索引を別巻に収録。

5. 著者が手がけたすべての序文、後書、解説等も収録。

底本

6. 原則として著者生前の最終版を底本に採用。さらに複数の版本を照合して校訂を行ない、精確さを極めた。

解題

7. 各著作の基本的な書誌情報、改訂内容、執筆背景等を詳細に解説。

（木下雄介執筆）

年譜

8. 世界での研究活動を含めた井筒俊彦の歩みを別巻に収録。（若松英輔執筆）

附録

9. 第九巻に講演「コスモスとアンティコスモス——東洋哲学の立場から」（天理大学主催「天理国際シンポジウム'86」）の音声CDを付ける。

各巻月報

10. 井筒俊彦の作品・人柄を語る国内外の多彩な執筆陣。

著者の蔵書サイン

——ビザンチン的キリスト教の神学が、古代ギリシャ的哲学精神が、ゾロアスタ教的二元論が、シリアの秀徹した理性が、ヘレニズム的グノーシスと神秘主義が、目もあやに錯綜しつつ新しい思想を織り出して行く。しかも一方、沙漠精神を代表するコーランは一字一句が聖なる神の言葉として厳然としてそれらの思想潮流の前に立ちはだかる。

（『イスラーム思想史』）

第八巻

意味の深みへ

一九八三年——一九八五年

ユング心理学と東洋思想（J・ヒルマン、河合隼雄との鼎談）
西脇先生と言語学と私
デリダのなかの「ユダヤ人」
語学開眼
シーア派イスラーム
文化と言語アラヤ識
単数・複数意識
「書く」——デリダのエクリチュール論に因んで
スーフィズムと言語哲学
スーフィズムとミスティシズム（H・ランドルトとの対談）
渾沌——無と有のあいだ
文学と思想の深層（遠藤周作との対談）
意味分節理論と空海
言語哲学としての真言
『意味の深みへ』あとがき

——人間のコトバを語る神、コトバを通して人間の言語的実存の中心部にじかに踏み込んでくる神。そこにセム的人格神の異常な人格性が成立する、と私は思います。（文学と思想の深層）

未発表作品
著作目録
井筒俊彦年譜
総索引

慶應国際シンポジウム「地球社会への展望」にて（一九七九年十二月）

井筒俊彦全集

全12巻・別巻

四六判・上製函入

配本予定

●第一巻

『アラビア哲学』

2013年9月末
ISBN978-4-7664-2071-5
予価（本体6,000円＋税）

●第二巻

『神秘哲学』

2013年10月末
ISBN978-4-7664-2072-2
予価（本体6,800円＋税）

●第三巻

『ロシア的人間』

2013年12月末
ISBN978-4-7664-2073-9
予価（本体6,800円＋税）

＊以降巻数順に刊行。2015年春完結予定。

装幀デザインは変更する可能性があります。

お申込み方法

・お申込書にご記入の上、お近くの書店にお持ちください。
・お近くに書店がない場合には、下記の弊社営業部に直接お申込みください。
〒108-8346　東京都港区三田2-19-30　TEL 03-3451-3584　FAX 03-3451-3122
また、弊社ホームページ上でもお申込みいただけます。
http://www.keio-up.co.jp

お申込書	書店名	発行：慶應義塾大学出版会　TEL:03-3451-3584　FAX:03-3451-3122
	［この欄は書店が使用します。］	全12巻・別巻［　　］セット　第7巻［　　］冊 第1巻［　　］冊　第8巻［　　］冊 第2巻［　　］冊　第9巻［　　］冊 第3巻［　　］冊　第10巻［　　］冊 第4巻［　　］冊　第11巻［　　］冊 第5巻［　　］冊　第12巻［　　］冊 第6巻［　　］冊　別巻　［　　］冊
		お名前 ご住所 お電話 E-mailアドレス

お申込書にご記入いただきました個人情報は、ご注文の書籍の発送およびご連絡のみに使用します。　2013.6

●お取り扱いは

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30
電話03-3451-3584　FAX 03-3451-3122
http://www.keio-up.co.jp
「井筒俊彦特設サイト」
http://www.keio-up.co.jp/kup/izutsu/index.html